

市民力かわる版

第12号

平成21年7月15日

編集/市民力かわる版編集委員会

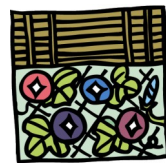
発行/矢板市秘書政策室

電話: 0287-43-1112

ファクス: 0287-43-2292

Eメール:

yaita@city.yaita.tochigi.jp



夏だ！祭りだ！ワッショイ！！

八坂祭(塩釜神社)

八坂祭の由来は、昔は「夏のこの時期、疫病や風水害など不安の多い季節で、それらは悪霊の仕業と思われていました。この疫病や悪行の不安を防ぐため、神輿に神様(すさのおのみこと 牛頭天王)を乗せ、町内を巡り、祓い清めた」といわれています。現代ではこんな話は誰も信じないでしょうが、この行事は神事というより、年に数回の伝統的な日本の風習の一つで、近所の人との交流が図れる絶好の機会のようなのです。



正午に塩釜神社を出発、御神灯を先頭に各町区のちようちゃん、ふれ太鼓、町区の役員が続ぎ矢板市内の七町区を神輿が巡行します。

一方各町区では、育成会の子どもが中心となり、山車を巡行させます。この山車にはお囃子が景気付けと調子合わせのために乗っています。しかし近年では子ども数が減少し、山車を巡行させるにも一苦労だそうです。お囃子にしても現代の忙しい子どもたちにはけいこも大変で、各町区では何とか



祭りを絶やすことなく盛り立てようと苦戦している所が多いようです。夕方になると、子どもたちによる山車の巡行は終わりが中心の祭りへと変わります。各町区から集まった大人たちによつて神輿が担がれ、町区を練り歩き、最後は塩釜神社に帰還。神輿をお宮に収納して祭りは無事終了します。

各町区では担当を割り振り、この祭りを盛り上げるよう一カ月も前から準備に取り掛かります。特に当日の賄いは、区内の婦人部や育成会の女性のボランティアが担当し、一〇〇人からの人の昼食や夕食の食材を準備し煮たきを行うので、公民館の狭い調理場が戦場のよう騒がしくなる町区もあるそうです。「賄いは大変だけど、元気に食べて無事に帰ってきて



塩釜さん豆知識

矢板の地に塩土翁命(しおつちのおじのみこと)が立ち寄り、製塩、畜産の方法を授け、その後奥州(今の宮城県)で海水による製塩の法を授けた、といわれています。従つて、宮城県の塩釜神社より矢板の方が古いらしい？

また市内には塩田、高塩、玉塩(今の玉田)と塩の字のつく地名があるので(塩谷町も)、この辺で塩が出来たのは確かだろう。に塩土翁命(しおつち)の神社は日本国内に現在約八万社があり、栃木県には一九〇〇社強で、矢板市には四十三社ある。また塩釜神社と名がつく神社は県内に合計三社がある。と、塩釜神社の伊藤文雄宮司が教えてくださった。



くればうれしい」と、係の人たちは言っていました。

地域におけるこのような伝統的な風習は、後世に残したい・残すべきだと分かつてはいても、実際にどのような対策をしたら良いのか頭を抱えてしまっているのが現状ではないでしょうか。参加者の減少が一番の悩みの種の一つです。祭りは地域交流の機会ととらえ、慣習や風習といった初めての人にはちよつと戸惑いがちな雰囲気も和らげるなど、一人でも多くの人が祭りに参加してもらえらるるよう、積極的に取り組む必要があるように感じられました。

